

ヤップ島に現存する日本委任統治時代の建築物(1)

—戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その3—

○正会員 辻原 万規彦*1 準会員 香山 梢*2
正会員 今村 仁美*3 正会員 平川 真由美*4

1. はじめに

本研究は、戦前期の南方諸地域を対象として、1) そこで行われた日本人による建築活動の実態、2) 当時用いられた室内環境調整手法の実態、3) 日本のいわゆる「南方関与」の技術的側面、特に建築活動の側面、を明らかにすることを目的としている¹⁾。

筆者らは、これまでに戦前期の南洋群島における建築組織について報告した¹⁾。それを受けて本報では、南洋群島ヤップ支庁(現ミクロネシア連邦ヤップ州)のヤップ本島に現存する日本委任統治時代に建てられた建築物に関する現地調査の結果を報告し、それらが建設された時期を明らかにすることを目的とする。

なお本報では、当時の用語、呼称をそのまま用いた。

2. ヤップ支庁の概要と南洋群島の教育機関

ヤップ支庁は、南洋庁の6つの支庁のうちの1つで、西カロリン群島を管轄し、支庁内には85の島があり、面積は226km²であった²⁾。ヤップ本島(図1の左側)は、ヤップ支庁内の最も主要な島であり、ヤップ支庁庁舎が

おかれ、面積216km²、昭和6年10月当時、邦人276人、「島民」3,858人、外国人8人が住んでいた³⁾。

表1に南洋群島における官設の教育機関の数を示す。表中の「公学校」は、いわゆる「島民」向けの修業年限3年の教育機関であり、尋常小学校と高等小学校は、当時の日本本土でのそれぞれと同様のものである。

3. マキ公学校と校長官舎

ヤップ本島トミル管区のマキ集落(図1の左側参照)には、公学校が設けられていた。

その開設の経緯は、以下の通りである⁴⁾。

「大正15年5月12日 南洋廳告示第五號を以て5月10日よりマキ公学校設置の旨告示された。よってトミル村長に命じ、前記島民学校所在地(トミル管区ソロール村のこと。筆者注。)に島民式校舎を建築せしめ、5月31日より授業を開始した。

一方新校舎敷地をウギル管区マキ村に選定し、大正15年7月より工事に着手し、関係職員の奮勵と、島民の努力により、昭和2年2月19日新校舎が竣工し同日移轉し、

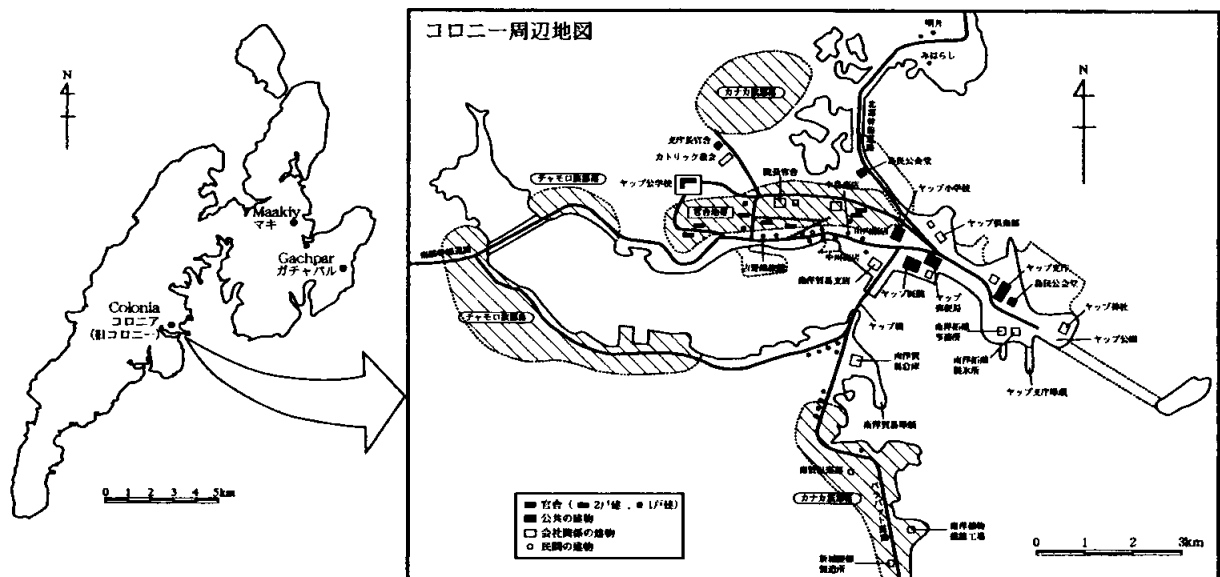


図1 ヤップ島全体図とコロニー周辺復元図

表1 南洋群島における官設の教育機関の数

支庁名	公学校	専常小學校	高等小學校	その他
サイパン	2	10	4	0
ヤップ	3	1	0	0
パラオ	5	1	1	1
トラック	6	1	0	0
ボナベ	5	2*	1	0
ヤルート	3	1**	0	0
合計	24	16	6	1

*:分教場1を含む。 **:特別學級1を含む。
「その他」は木工徒弟養成所

翌20日より授業を開始した。」

この新校舎は、木造平屋建、建坪数274m² (82.9坪)で、経費が5,276円かかり、同時に便所(木造平屋建、建坪数9m² (2.7坪)、経費197円)、教員宿舎(木造平屋建、建坪数51m² (15.4坪)、経費4,321円)も新築された⁵⁾。表2に、昭和10年4月現在のマキ公学校の土地と建物の面積を示す⁶⁾。土地と建物の両面から、群島内でも比較的大きな公学校であったことがわかる。なお、昭和16年9月当時には、教員官舎が2棟、校長官舎が1棟あった⁷⁾。

マキ公学校の校舎と校長官舎の遺構の実測図を図2と図3に示す。また、ヒアリングや当時の写真をもとに推測した間取り図もあわせて示す。なお、一般の教員官舎については、実測ができなかった。

実測図によれば、校舎の建坪は110坪で、後に増築されたことがわかる。これは、昭和6年度に建坪89.38m²

表2 マキ公学校の土地と建物面積(昭和10年現在)

	マキ公学校	群島内順位	群島平均
學校敷地	3,708	6 (24)	2,913
附属官舎敷地	1,200	1 (9)	367
其ノ他學校敷地	120	5 (6)	1,899
學校用土地合計	5,028	6 (24)	3,658
校舎	110	8 (24)	91
附属舎	3	13 (23)	13
附属官舎	48.68	3 (19)	29
建物坪数合計	161.68	9 (24)	143

注) 単位は坪。 () 内は、総数。

(27.0坪)、経費2,205円で増築されたものである⁸⁾。

写真1は、昭和12年当時の写真として文献4)に示されているが、昭和12年という記述は誤りと考えられるものの、写真と実測図から新築時の校舎の左側に部屋増築されたことがわかる。

校長官舎は、実測図によれば建坪19坪であるので、前出の昭和2年新築の教員宿舎とは異なるものと考えられる。しかし、公学校開設時から訓導(教員)は3名であったので、同時に建設されたと推測される。なお、昭和7年には大橋節三校長^{註2)}が校長官舎に住んでいた⁹⁾。

4. コロニー周辺復元図と官舎

支庁庁舎がおかれていたヤップ本島コロニー周辺の復元図^{註3)}を図1の右側に示す。復元図の幾つかの官舎もしくはその遺構の現存が確認され、調査ができた鉄筋コンクリート造の一戸建て官舎の実測図を図4に、鉄筋コン

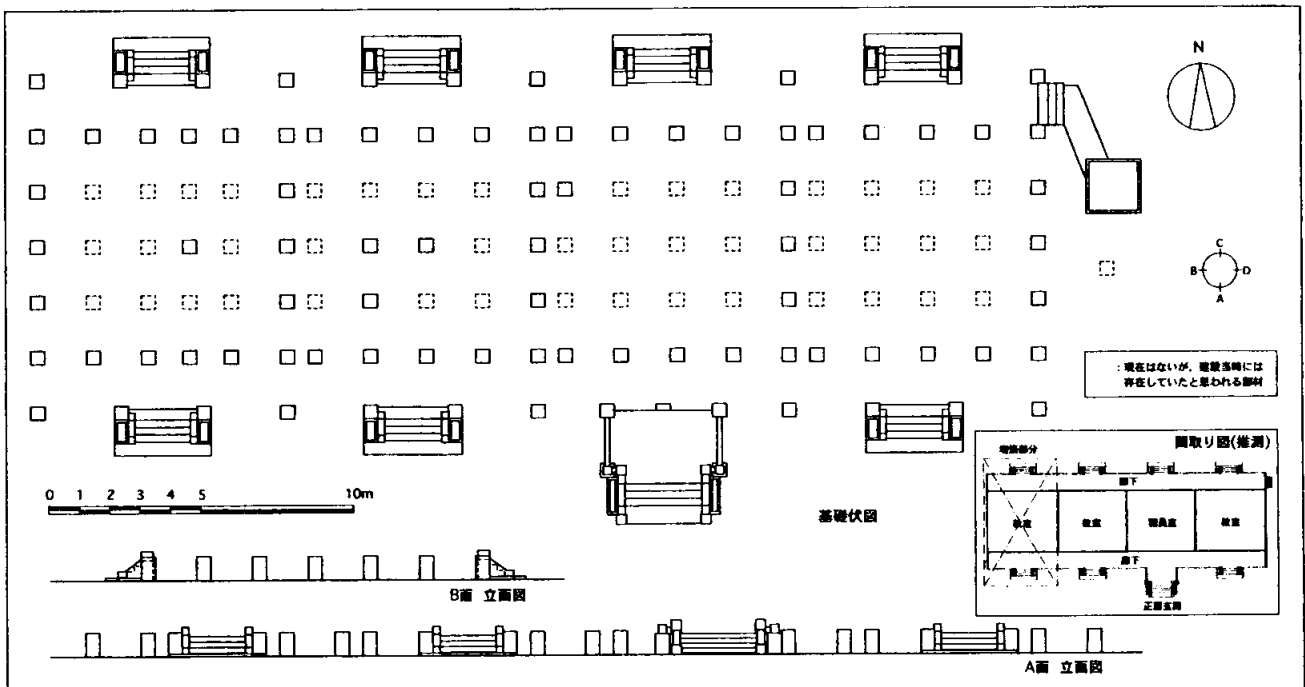


図2 マキ公学校校舎実測図

クリート造の二戸建て官舎の実測図を図5に示す。また、ヒアリングなどをもとに推測した間取り図もあわせて示すが、両者の間取りは同じであったと考えられる。

これらの官舎は、昭和3年発行の写真集¹⁰⁾のコロニーの全景写真に写されている。この写真には、昭和2年10月竣工のヤップ公学校校舎も写されているので、それ以降の写真であると考えられる。

また、大正14年12月15日に、台風により「家屋ノ流失670戸、倒壊974戸」の「言語二絶シタル」災害を受け、南洋庁は災害費を計上し、復旧に努めた¹¹⁾。その際に、ヤップ公学校は、「過去の風害を鑑みて」、それ以前の木造から鉄筋コンクリート平屋建てに改められ、昭和2年10月に竣工した¹²⁾。

官舎などについても、同時に木造から鉄筋コンクリート造に改められて再建されたと考えられるため、図4と図5の官舎も大正15年から昭和3年頃に建てられたもの

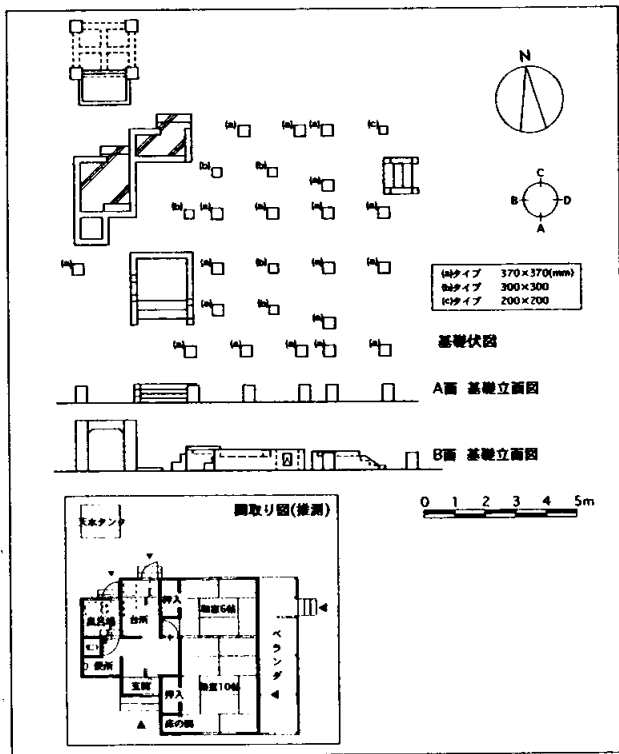


図3 マキ公学校校長官舎実測図

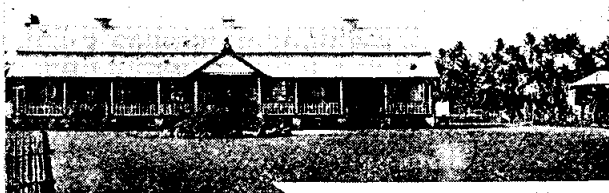


写真1 マキ公学校校舎

と推測される。

なお、ほぼ同時期に建てられたにもかかわらず、コロニーから離れたマキ公学校の校舎は木造であったことは注目に値する。

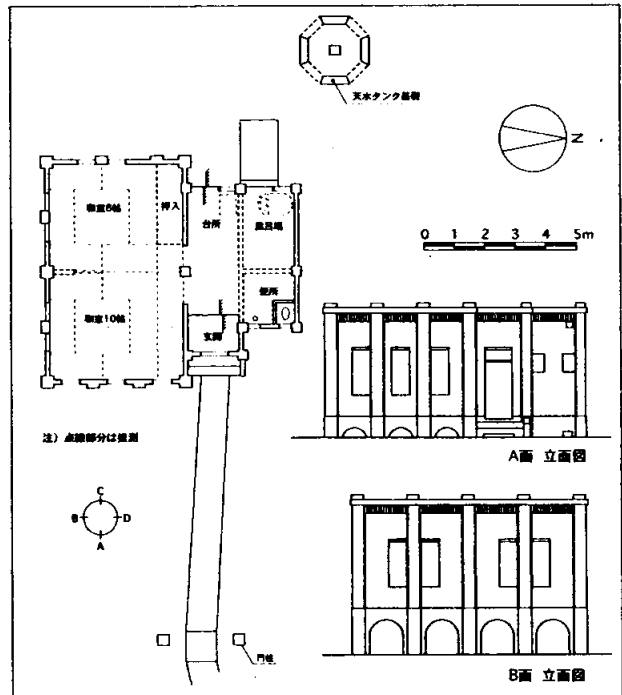


図4 鉄筋コンクリート造一戸建て官舎実測図

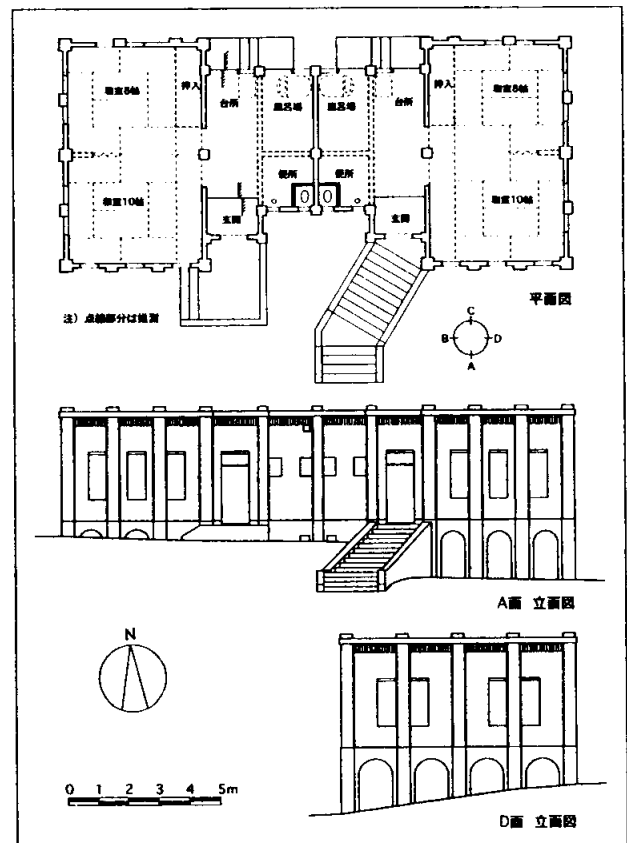


図5 鉄筋コンクリート造二戸建て官舎実測図

5. ガチャバル巡査駐在所

ヤップ本島ウギリ管区のガチャバル集落（図1の左側参照）で確認された巡査駐在所の遺構の実測図とヒアリングなどをもとに推測した間取り図をあわせて図6に示す。この巡査駐在所の平面は、文献1）で報告したアジア・太平洋資料室所蔵の設計図のうち『南洋廳巡査駐在所標準型設計圖乙號型』（南洋廳土木課，課長田吹，審査山下，設計製図仲摩，写図仲摩，昭和14年4月）の平面図（図7）を線対称に変更したものである。

建設時期については、昭和14年4月当時の資料¹³⁾には、存在が示されていないことから、それ以降に建てられたと考えられるが、今後の検討が必要である。

6. まとめ

ヤップ島に現存する日本委任統治時代の建築物に関する

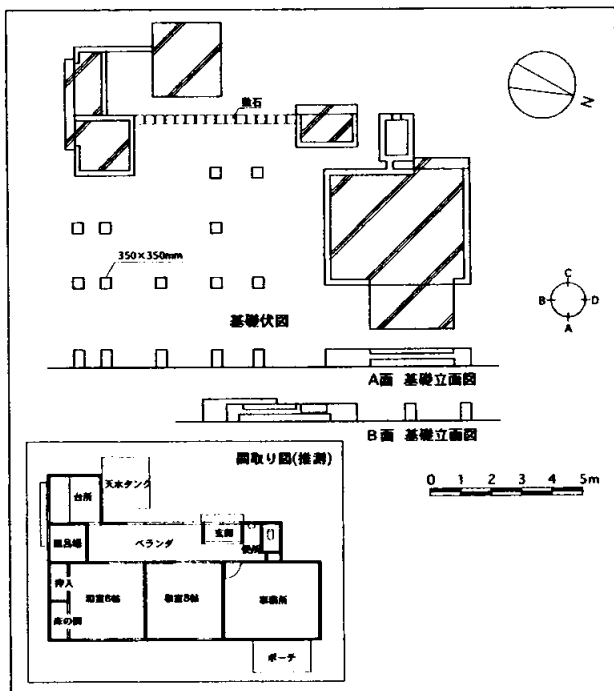


図6 ガチャバル巡査駐在所実測図

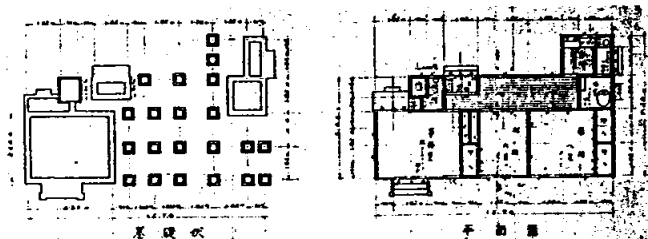


図7 南洋廳巡査駐在所標準型設計圖乙號型

る現地調査の結果、マキ公学校校舎と校長官舎、コロニーの官舎、ガチャバル巡査駐在所の実測図を示し、それらの建設時期を明らかにし、さらにコロニー周辺の復元図を作成した。

なお、遺構が現存するとされているニフ公学校やコロニーにおける他の建築物については、稿を改めたい。

謝辞：ヤップの現地調査の際にはヤップ高校の大橋旦先生に多大な援助を頂いた。また、資料の収集にあたってはアジア・太平洋資料室の山口洋児室長に、情報収集にあたっては太平洋学会の中島洋専務理事にご助力頂いた。なお本報の一部は、平成13年度（第39回）三島海雲記念財団学術奨励金、平成13年度科学研究費補助金（奨励研究（A）, 課題番号13750557）によった。記して謝意を表す。

<脚注>

- 注1) 本研究全体の枠組みの詳細は、文献14)を参照。
- 注2) ヤップ高校の大橋旦先生の父君。『旧植民地人事総覧 樺太・南洋群島編』（日本図書センター，1997.2.）により確認。
- 注3) 『Topographic Map of Yap Islands』（United States Geological Survey, 1983）を基に、文献13），『Visitors' Guide Map Yap』（Yap Visitors Bureau），ヤップ高校の大橋旦先生への聞き取り調査などを総合して作成した。

<参考・引用文献>

- 1) 矢野，辻原，平川：南洋群島における建築組織について－戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その2－，日本建築学会九州支部研究報告，第40号，pp.633～636，2001.3
- 2) 南洋廳長官々房：南洋廳施政十年史，南洋廳長官々房，pp.2～3，1932.7
- 3) 前掲書2），p.15
- 4) 南洋群島教育會：南洋群島教育史，南洋群島教育會，pp.515～517，1938.10
- 5) 外務省：1927年度日本帝國委任統治行政年報，外務省，p.94，1928.9
- 6) 前掲書4），pp.762～763
- 7) 田中準一：カナカの子らと共に－統風來坊先生滞南記－，和師翠交會，p.124，1988.1
- 8) 前掲書2），pp.146～159
- 9) 大橋旦：私が子供時代を過ごしたヤップ，太平洋学会誌，第30号，pp.10～28，1986.4
- 10) 天野代三郎：ヤップ島写真集，天野商店，1928
- 11) 前掲書5）pp.135～138
- 12) 前掲書4），pp.508～511
- 13) ヤップ支廳：ヤップ島概要，ヤップ支廳，1939.4
- 14) 八幡，辻原，平川：「南方建築」に用いられた室内環境調整手法－戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究 その1－，日本建築学会九州支部研究報告，第40号，pp.129～132，2001.3

*1：熊本県立大学環境共生学部 講師・博士（工学）
 *2：熊本県立大学生活科学部
 *3：アトリエ・イマージュ
 *4：熊本県立大学環境共生学部 助手・修士（工学）

Senior lecturer, Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.
 Faculty of Human Life Science, Prefectural University of Kumamoto
 Atelier Image
 Assistant, Prefectural University of Kumamoto, M. Eng.